

洋服論

永井荷風

青空文庫

○日本人そもそも洋服の着始めは旧幕府仏蘭フランス西式歩兵の制服にやあらん。その頃膝取マンテルなぞと呼びたる由なり。維新の後岩倉公西洋諸国を漫遊し文武官の礼服を定められ、上等の役人は文官も洋服を着て馬に乗ることとなりぬ。日本にて洋服は役人と軍人との表向きに着用するものたる事今においてなほ然り。

○予が父は初め新銭座しんせんざの福沢塾にて洋学を修め明治四年亞墨利アメリカ加カに留学し帰朝の後官員となりし人にて、一時はなかなかの西洋崇拜家なりけり。予の生れし頃（明治十二年なり）先考せんこうは十畳の居間に椅子いす卓テーブル子を据すゑ、冬はストオブに石炭を焚たきてをられたり。役所より帰宅の後は洋服の上衣うわぎを脱ぎ海老茶色のスモーキ

ングチャケツトに着換へ、英国風の大きなパイプを啣くわへて読書してをられたり。雨中は靴の上に更に大きな木製の底つけたる長靴をはきて出勤せられたり。予をさな心に父上は不思議なる物あまた所持せらるる事よと思ひしことも数しばしばなりき。

○予が家にてはその頃既にテーブルの上に白き布をかけ、家庭風の西洋料理を食しむたり。或年の夏先考に伴はれ入谷いりやの里に朝顔見ての帰り道、始めて上野の精養軒に入りしに西洋料理を出したるを見て、世間にもわが家と同じく西洋料理を作るものあるにやと、かへつて奇異の思をなしたる事もありけり。

○予六歳にして始めてお茶の水の幼稚園に行きける頃は、世間一般に西洋崇拜の風甚熾はなはだにして、かの丸の内鹿鳴館ろくめいかんにては夜会の

催しあり。女も洋服着て踊りたるほどなり。されば予も幼稚園に
 は洋服着せられて通はされたり。これ予の始めて洋服なるもの着
 たる時なれど、如何なる形のものなりしや能くは記憶せず。小学
 校へ赴く頃には海軍服に半ズボンはきたる事は家にありし写真に
 て覚えたり。襟えりより後は肩を蔽おほふほどに広く折返したるカラーを
 つけ幅広きリボンを胸元にて蝶結びにしたり。帽子は広き罫つばあり
 て鉢巻のリボンを後に垂らしたり。ズボンは中学校に入り十五、
 六歳にいたるまで必半ズボンかならずなりき。その頃予の通学せしひとつば一
 橋しの中学校にては夙つとに制服の規定ありしかば、上衣だけは立たちえ
 襟りのものを着たれど長ズボンは小児の穿うがつべきものならずとて、
 予はいつも半ズボンなりしかば、この事一校の評判になりて大おおぜ

勢いのものより常に冷笑せられたり。頭髮も予は十二、三歳頃ま

では西洋人の小児の如く長目に刈りていたり。さればこれも学校にては人々の目につきやすく異人の児こよとて笑はれたりしなり。

○つい愚にもつかぬ回旧談にのみ耽ふけりて申訳なし。さて当今大正年間諸人の洋服姿を拝見して聊いささか愚論を陳のぶべし。

○日露戦争この方十年來いたるところ 到いた 処ところ 予の目につくは軍人ともつかず学生ともつかぬ一種の制服姿なり。市中電車の雇やとい人にん、鉄道院

の役人、軍人の馬丁。銀行会社の小こづかい使いなど、これらの者殆ど学生と混同して一々その帽子またはボタンの徽きし章しょうにでも注意せざ

れば、何が何やら区別しがたき有様なり。以前は立襟の制服は学生とのみ、きまりてゐたりし故、敝衣へいも更いに賤いやしからず、かへつ

て物に頓着せぬ心掛殊勝に見えしが、今日にては塵にまみれし制服着て電車に乗れば車掌としか見受けられず。学生の奢侈しゃしとなりしも道理なり。

○到る処金ボタン立襟の制服目につくは世を挙げて、陸軍かぶれのした証拠なり。何となく独逸国ドイツにゐるやうな心地にてわれらにははなはだ甚閉口なる世のさまといふべし。

○夏となればまた制服ならぬ一種の制服目につくなり。銀行会社は重役頭とうどり取より下は薄給の臨時雇のものに至るまで申合せたるやうに白き立襟の洋服を着手きに扇子せんすをパチクリさせるなり。保険会社の勧誘員新聞記者また広告取なぞもこれに倣ならふ。日比谷辺より銀座丸内一帯は上シャンハイ海ホンコン香港の如き植民地のやうになるなり。

○日本人は洋服着ながら扇子を携へ持ち、人と対談中も絶間なくパチクリ音をさせる。但しこれを見て別に怪しむ者もなきが如し。これ日本当代特異の風習なり。西洋にては男子は寒暄かんけんにかかはらず扇子を手にすることなし。扇子は婦人の形容に携ふるものたる事なほ男子の杖におけるが如し。されば婦人にも人の面前にては扇を開きてあふぐ事なし。半開になして半面を蔽ふなぞ形容に用るのみなり。然るに我国当世のさまを見るに、新聞記者の輩やからは例の立襟の白服にて人の家に来り口に煙草を啣くわへ肱ひじを張つてパタパタ扇子を使ふが中には胸のボタンをはづし肌着メリヤスのシヤツを見せながら平然として話し込むも珍しからず。

○我国にては扇は昔より男子の携たずさえも持ちたるものなれど、人の

面前にて妄みだりに涼を取るものにはあらず、形容をつくらんがため手に持つのみにて開閉すべきものにはあらざるべし。

○メリヤスの肌着は当今の日本人上下一般に用ふる所なり。日本人はメリヤスの肌着をホワイトシャツと同じもののやうに心得てゐるが如くなれどこれ甚しき誤なり。ホワイトシャツは譬たとへば婦人の長襦袢ながじゆばんの如し。長襦袢には半襟をつける。ホワイトシャツにはカラアをつける。婦女子が長襦袢は衣服の袖口または裾より現れ見ゆるも妨げなきものなり。ホワイトシャツもまたその如し。然れどもメリヤスの肌着に至つては犢鼻褌ふんどしも同様にて、西洋にては如何なる場合にも決して人の目に触れしむべきものにあらず。米国人は酷暑の時節には上衣を脱しホワイトシャツ一

枚になつてをる事もあれど、この場合にてもメリヤスの肌着は見えぬやうに注意するなり。ホワイトシャツの袖口高く巻上げ腕を露出せしむる時にもメリヤスの肌着は見せぬやうにするなり。米國にて男子扇子を携ふること決してなし。

○暑中銀行会社などにて事務を取る者は米國にては上衣を脱する事を許さるるなり。されどこの場合ズボン釣はせぬ方よしとせらる。ズボンは皮帯にて締めボタンを隠すなり。

○暑中用ふるホワイトシャツには胸の所軟く袖口も糊のりばらぬものあり。従つて色も白とはかぎらず、変り縞しま多し。皆米國の流行にして礼式のものならずと知るべし。

○米國は市俄古紐シカゴニューヨーク育いづこも暑氣非常なる故龍動ロンドンまたは巴パ

リ^リの如く品好^{ひんよ}き風俗は堪難^{たえがた}し。我国夏季の氣候は、温度は米
 国に比すれば遙に低けれど、湿氣あつて汗多く出るをもて洋服には
 甚不便なり。日々洋服きて役所会社に出勤する人々の苦しみさぞ
 かしと思へど規則とあれば是非なし。むかしは武士のカラ脛^{すね}、奴
 の尻の寒^{かんざら}晒し。今の世には勤^{つとめ}人^{にん}が暑中の洋服。いつの世に
 も勤はつらいものなり。

○近年堅きカラーの代りにシャツと同^{とも}色^{いろ}の軟きカラーを用ゆる
 ものあり。これまた米国の風にして歐洲にては多く見ざる所なり。
 米国にても若き人専^{もつぱら}これを用ひ老人はあまり用ひず。

○パナマ帽は歐洲にても大陸の流行にて英国にては用る者少し。
 米国もまた然り。英米人の夏帽子には麦藁^{むぎわら}多しと、五、六年前

帰朝者の語る所なり今は知らず。

○ハンケチは晒さらしあき麻の白きを上等とす。繡ぬいとり取または替り色は

婦人のものなり。男子これを用る時は気障きざの限りなるべし。米国

にてはきざな男折々ハンケチを上衣胸うわぎのかくしよりちよつと見せ

る風あり。英国人は袖口へハンケチを丸めて入れ込む風あり。

○米国人は雨中といへども傘を携へず。いはんや晴天ひがさの日傘をや。

細巻の洋傘ステッキの如くに細工したるものは旅行用なり。熱帯

の植民地は一日に二、三回必驟かならげゆうう雨来るが故に外出の折西洋人は

傘を携ふ。日本の気候四季共に雨多し。植民地の風をまなびて傘

を携ふべきことけだしやむをえざるなり。ヘルメット帽は驟雨に

逢ふ時は笠の代用をなし炎天には空気抜より風通ひて涼しく、熱

帯には適したるもの。英国人の工風くふうに創はじまるといふ。

○半靴は米国にては人々酷暑の折これを用ゆ。歐洲にては寒暑共に半靴を穿うがつものなし。赤皮の靴は米国歐洲ともに夏にかぎりて用ゆるも礼式には避くべきなり。然るに日本にてはフロツクコートに赤皮の半靴はきたる人折々あり。これ紋もん付羽織袴はおりはかまにて足袋たびをはかざるが如きものなり。

○洋服はその名の示すが如く洋人の衣服なれば万事本場の西洋を手本にすべきは言ふを俟またざる所なり。然れども色地縞柄きいろなどはその人々の勝手なる故、日本人洋服をきる場合には黄きいろき顔色に似合ふべきものを択ぶ事肝要なるべし。色白き洋人には能よく似合ふものも日本人には似合はぬ事多し。黒、紺こん、鼠ねずみなぞの地色は何人

にも似合ひて無事なり。英国人は折々狐色の外套を着たり。よく似合ふものなり。日本人には似合はず。縞柄あらしものは下品に見ゆ。霜降り地最も無事なるべし。

○洋服の形は皆様御ごぞんじ存の通り、背広、モオニングコート、フロックコート、燕尾服えんびふくの類なり。背広は不断着ふだんぎのものにて日本服の着流しに同じ。モオニングコートも儀式のものにはあらず。歐洲にては背広の代りにモオニングをきてゐる人多し。背広にては商店の手代てだいに見まがふ故なるべし。日本人は身丈高みたけからざる故モオニングは似合はず。かつまたその仕立形むづかしきもの故、日本にてはやはり背広が無事なり。

○米国にては上下を通じて大抵の人皆背広を用ふ。米国の仕立は

歐洲のものに比してズボンも上衣も共にゆつたりとしてだぶだぶするほどなり。歐洲にても英國風は少しゆるやかなる方なれど、仏蘭西風はキチンと身体に合ふやうにし袖そでの付根つけねなぞ狭くして苦しきほどなり。日本人には米國風の仕立方適するが如し。されど男物は英國風を以て随一となすことあたかも女物の巴里パリにおけるにひとし。これ世界の定論なり。

○歐米の官吏は日々フロツクコートを着るなり。されば紐ニューヨーク育育市シカゴ俄古シカゴなぞよべる商業地には官庁なく従つて官吏なきを以て、宣教師の外には見すばらしきフロツクコートの人を目にすること稀なり。これに反して華盛頓ワシントン府を始め各州の首都に至ればフロツクコートきたる人多し。フロツクコートに用る帽子は必かならずシルクハ

ツトなるべし。歐洲にてはモーニングコートに高帽子を冠るもの
尠すくなからず。品よく見えてよきものなり。

○午後の集会茶談会、または訪問の折には欧米共に必フロックコ
ートを着し点燈の頃より燕尾服に着換ふるなり。西洋にて紳士風
の生活をなすには一日の中に三度衣服と帽子とを換へざるべから
ず。これ東洋豪傑ごうけつはだ肌の人の堪へ得べき所にあらざるべし。

○手袋は寒暑ともに穿つものなり。これもまた日本人には煩瑣はんさに
堪へざる所ならん。

○杖は日本人もこれを携たずるもの多し。されどよく見るに杖の携方
を心得たるは稀なり。西洋の杖はわが国の老人または盲者の杖と
は異なるものにて形容に過ぎず。歩行を扶たすけんがために地面に突く

べきものには非らざるなり。杖の先に土の附きたるは甚見苦しきものなり。杖は客間にも帽子と共に携へ入りて差つかへなきものなればその先には土の附かぬやうにすべきなり。西洋にては美術館、図書館、劇場等到处杖を持ちたるままにて出入し得るなり。日本にては杖は下駄同様に取上げらるるが故銀細工象牙細工ぞうげなどしたるものは忽疵たちまぢず物ものになさるる虞おそれあり。東京市中電車雑沓まことの中に泥の附きたる杖傘の先をば平然として人の鼻先へ突付ける紳士もあり。洋風を模していまだ至る事能あたはざる大正の世の中洵まことに笑ふべきこと多し。

○帽子は既に述べしが如く洋服の形に従つて各戴おのくべきものあり。背広に烏打帽を冠ふさわるは適ふさわしからず。烏打帽はその名の如く銃獵、

旅行航海等の折にのみ用るものにて、平生都会にてこれを戴くもの巴里あたりにては職工か新聞売子なぞなるべし。欧米ともに黒の山高帽は普通一般に用ひらるるものなり。殊に米国東部の都市にては晴雨共に風甚しきが故、中折帽は吹飛ばされて不便なり。かつまた山高帽は丈夫にて雨にあたりても形崩れず、甚經濟なるものなり。夏の炎天にても黒山高帽にてすこしも可笑おかしきことなし。中折帽は春より夏にかけて年々の流行あり。されば中折帽を冠るほどなれば洋服もこれに準じて流行の形に従はざれば釣合はずと知るべし。日本人は一般に中折帽を好む。然れども市中の電車にて見るが如き形の崩れたる古き中折帽は西洋にては土工の戴けるものの外ほか見ることなし。米国にては上下の階級なき故日曜日

には職工も新しき黒の山高帽を戴き女房の手を引きて教会へ説教聞きに行くなり。

○洋服の仕立は日本人よりも支那人の方遙に上手なり。東京にては帝国ホテル前の支那人洋服店評判よし。燕尾服もこの店なれば仕立て得べし。銀座の山崎などは暴利を貪るのみにて、縫目ぬいめあるいはボタンのつけ方健固けんこならず。これ糸を惜しむ故にして、日本人の商人ほど信用を置きがたきはなし。

○仏蘭西にて画工詩人音楽家俳優等は方外の者と見なされ、礼儀に拘こうそく捉とせざるもこれを咎とがむるものなし。さればこの仲間の弟子には自ら特別の風俗あり、頭髮を長くのばし衣服は天鷲絨ピロードの仕事服にて、襟かぎりの長きを風になびかし、帽子は大黒頭巾の如き

を冠る。中折帽に似てその鍔つば広く大なるを冠るもあり。これを芸人帽子（シャツポードルチスト）と呼ぶなり。冬も外套を着ず。マントオを身にまとふ。眉びもくせいしゅう目清秀なる青年にてその姿やや見すばらしきが雪の降る夕なぞ胡弓入れたる革かわかばん鞆たもとを携へ公園の樹陰を急ぎ行く姿なぞ見れば、何となく哀れにまた末すえたのも頼しき心地せらるるなり。かかる風俗巴里ならでは見られぬなり。

○都見物左衛門先生が『時勢粧いまようすがた』あまりの面白さに、己れもまけじと洋服論書きて見たれど、どうやら種も尽きたれば自然これにて完結とはなりけらし。

大正五年八月

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

洋服論

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>